ヘルパー日誌 (6)

きいてください　私たちの仕事のこと

栃木・介護サービスセンター虹　金田千恵

もう、ご協力くださいましたか？

「介護署名」を集めています 。

民医連では介護保険改善を求め運動を始めています。ご協力ください！

事例

超高齢者の支援　介護する家族にも注意し

日本の一〇〇歳以上の高齢者は三万人を超えています（〇七年・厚生労働省発表）。私たちも一〇〇歳を超える方を支援しています。

完ぺきな介護をめざす介護者

私たちがAさんの訪問介護を始めたのは、Aさんが一〇〇歳の誕生日を迎えられたころでした。

Aさんはいつも感謝の言葉を絶やさず、周りを気遣う方でした。介護の主体はご家族のBさん。Aさんが無理なく在宅で過ごせるよう、細心の注意を払い、完ぺきな介護をこころがけておられました。ヘルパーにも、食事のときの姿勢や水のとり方、体の拭き方、着替えなどに細かい指示が入ります。

私たちは利用者の意思を尊重した支援をしようと「Aさんができることはご本人に任せましょうか？」と提案しましたが、Bさんは高齢を案じ同意しませんでした。

施設外泊断られ　募る家族の疲労

やがて病状の関係で、Aさんの体に尿を出すためのチューブが入りました。これを理由に毎月利用していたショートステイを、施設側が断わってきました。施設も職員の手が足りず、痰の吸引、経管栄養、導尿、酸素吸入、人工呼吸器の管理など医療的ケアの必要な人の利用を拒否することが珍しくないのです。

Bさんの疲れやストレスは大きくなり、Aさんへの声のかけ方やお盆の置き方ひとつみても、それがわかるようになりました。Aさんも「私が泊まり（ショートステイ）にいけないので、家族が疲れる」と心配します。

「ヘルパーにできること」探しつつ

私たちは、ケアマネージャーにショートステイ先の確保を強く要請しました。同時に、訪問の際には意識してBさんに話しかけ、愚痴や不満を聞くことにしました。ヘルパーの注意は、介護を受ける利用者さんだけではなく、時として介護の大部分を担っている家族にも向いています。介護ストレスの解消に役立っているかどうかはわかりませんが、以前よりもBさんとヘルパーの会話は増えました。

また、Aさんが持つ「自分でできることはしたい」という意欲も尊重。Bさんが見ていない場面で、ご自分で体を拭いたり、着替えたりしてもらうなど、工夫して支援にあたっています。

◆

AさんとBさんの間には家族だからこそ築ける信頼があります。その中でも私たちは、ヘルパーだからこそできる支援を探しながら、Bさんといっしょに Aさんの在宅での生活を支えていきたいと考えています。皆の共通の目標は、Aさんの次の誕生日を元気で迎えることです。

ほっと介護 ⑦⑨